

陽性であったことから DLBCL と診断された。確定診断後、全例当院血液内科に転科し早急に治療を開始、局所制御がなされた。

考察：唾液腺原発の悪性リンパ腫の大半は MALT リンパ腫と言われているが、自験例では 1 例のみであった。他の 2 例は DLBCL で、これは MALT リンパ腫や濾胞性リンパ腫から移行して発生すると言われている。しかし、臨床的悪性度では MALT リンパ腫は低悪性、DLBCL は高悪性に分類され、治療法や予後が異なってくる。画像検査による評価に加え、病理組織検査による病態の把握は、治療法の早期決定のためにも重要である。

結論：一般に唾液腺原発の悪性リンパ腫は MALT 型が多いといわれているが、自験例では異なっていた。悪性リンパ腫は組織型により治療法や予後が大きく異なることより、唾液腺に生じたものでも MALT 型以外の可能性を考慮し対応すべきである。

演題 2. 破骨細胞の細胞死におけるカルパインの関与について

○鍵谷 忠慶, 石関 清人, 藤原 尚樹,
原田 英光

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

目的：calpain はカルシウムによって活性化される細胞質に存在するシステインプロテアーゼである。最近、好中球のアポトーシスにおいて calpain の関与が報告された。我々は造血幹細胞由来である破骨細胞において、 μ -calpain と m-calpain の発現を見出した。しかし、アポトーシスとの関連は不明であるため、これについて検討した。

材料・方法：マウス骨髄細胞を macrophage colony stimulating factor (M-CSF) と receptor activator of NF κ B ligand (RANKL) 存在下で 6 日間培養し、破骨細胞を形成させた。その後、M-CSF と RANKL 非存在下で 12 時間培養することによって、破骨細胞にアポトーシスを誘導した。培養終了後固定し、 μ -calpain と m-calpain を蛍光免疫染色した。また、半定量的 RT-PCR 法で μ -calpain と m-calpain の発現について検索した。

更に、アポトーシス誘導時に Calpastatin Peptide (カルパイン阻害剤) 存在下で培養し、tartrate resistant acid phosphatase (TRAP) 染色を行い、TRAP 陽性多核細胞数(破骨細胞数)の計測を行った。同時に caspase3/7, 8, 9 の活性を測定した。

結果： μ -calpain は破骨細胞の細胞質全体に発現しており、アポトーシス誘導によってその発現が上昇した。m-calpain はアポトーシス誘導前では発現していなかったが、アポトーシス誘導後、アクチンリング周囲に強く発現した。Calpastatin Peptide によってアポトーシスによる破骨細胞数の減少と caspase3/7, 8, 9 の活性上昇が有意に抑制された。

考察： μ -calpain と m-calpain は共に破骨細胞のアポトーシスに関与していることが示唆される。

演題 3. 4-D コンセプトに基づいた審美的・機能的インプラント治療

○高橋 典子, 高橋 衛*

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座,
医療法人高橋衛歯科医院*

我々は、4-D コンセプトに基づいたインプラント治療を行い、機能的ならびに審美的に良好な結果が得られた 2 症例について報告した。

インプラント治療における 4-D コンセプトとは、最良の審美的・機能的な結果を得るために、インプラント埋入位置方向と周囲組織の 3 次元的なマネージメントに加え、治療手順のタイミングを考慮した治療計画を立て、適切な時期に治療を行うという概念の総称である。

今回は、前歯部において抜歯即時インプラント埋入ならびに抜歯即時 GBR(Guided bone regeneration) の後、ステージドアプローチによるインプラント埋入を行い審美性と機能が回復された症例と、臼歯部において抜歯即時 GBR によって垂直的な歯槽堤増大を行った後、ステージドアプローチによるインプラント埋入により審美性と機能が回復された症例とを供覧した。

2 症例とも審美的・機能的に良好な結果が得られ、3 次元的なマネージメントに加え、治療のタイミングを考慮した 4-D コンセプトとい